

戦争末期の『北窗』

「掌篇献納小説」を中心に

祝 然

✉ zheranjun@163.com

At the end of the Second World War, the magazine *HokuSou* had become involved in the war as well. Although the magazine assumed a supportive attitude toward the war at that time, it reflected a diversity of views to some extent. Not long after the Greater East Asia War broke out, the *Syouhen Kennou* novel was born. As with *HokuSou*, the *Syouhen Kennou* novels also presented several different positions by not only supporting the war, but also clearly showing the opposition clearly. On this subject, this thesis investigates the *Syouhen Kennou* novel published in *HokuSou* and analyses the complex character of Manchukuo's literature.

Keywords Literature of Manchukuo(「満洲文学」), *Syouhen Kennou* Novel(「掌篇献納小説」), *HokuSou*(『北窗』), Greater East Asia War(大東亜戦争)

1. はじめに

1941年12月8日、日本は真珠湾襲撃でアメリカ・イギリスに宣戦した。同年12月12日の閣議決定(東條内閣)により、「大東亜戦争」の名称と定義が定められ、後に中日戦争、対蘭戦争、対ソ連戦争も「大東亜戦争」の範囲に採り入れられた。「大東亜戦争」の勃発により、日本は戦争時代のピークを迎えたが、その後の戦況は好調ではなく、長すぎた戦線はかえって日本を戦争の泥沼に引き込んだ。それゆえ、戦争の大幕を開いたばかりの日本は時を経ずして戦争末期の状態に入っていたのであった。

同時代の「満洲文芸」はほぼ同じ光景を呈していた。その中には「大東亜戦争」を支持していた作品もあり、戦時下の窮乏を映していた作品もあった。「北に開かれた窓」として創刊された雑誌『北窓』も「満洲文芸」、「国策」などに迎合し、北満にとどまらず、偽満洲国全域の作家を集め、「大東亜戦争」の炎に包まれた「満洲文芸」の状況をはっきりと示していた。特に第五卷(1943年出版)に入った『北窓』は「大東亜文学者大会」の提唱に応じるため、雑誌全体の構成を調整し、新しいコラムも加えた。第五卷第二号から第四号までの雑誌はコラム「掌篇献納小説」を設置し、青木実、高木恭造などによる献納小説を十二篇掲載した。載せられた献納小説は「掌篇」で、一見すると至極簡単な形で書かれたが、内容から見れば文章に織り入れた時代性と政治性が歴然であり、そこから戦争末期における『北窓』、「満洲文芸」の複雑な状況もある程度読み取れる。それゆえ、本論文は『北窓』に掲載された「掌篇献納小説」を中心に、雑誌『北窓』に基づいて同時代の「満洲文芸」の状況を考察してみたい。

2. 雑誌『北窓』

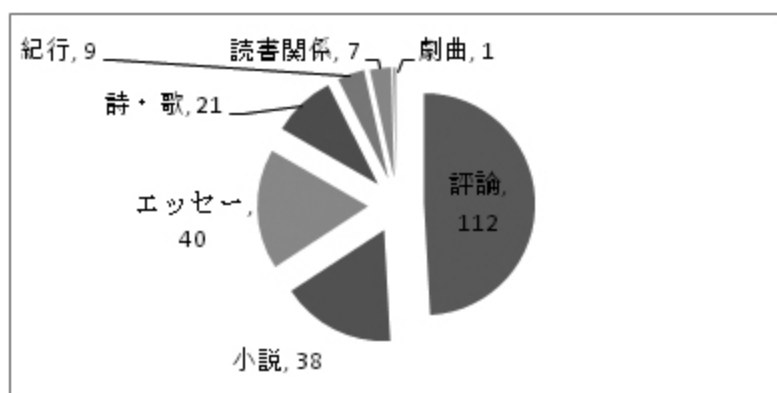
「掌篇献納小説」を取り上げる前に、まずは雑誌『北窓』の歴史について少し眺めておく。

隔月刊誌『北窓』は南満鉄道株式会社ハルビン図書館の館報。発刊は1939年(昭和十四年)の五月、終刊は1944年(昭和十九年)の三月。公式雑誌として、約五年間(全二十六冊)の命はたしかに短いかもしいないが、同じ短命な偽満洲国の産物で当時の社会変遷をよく映し出していた。同誌は「図書館館報」と名づけられたが、内容といい形式といい総合雑誌の性格が強く、図書館関係の文章のみならず、文化、文芸などの領域にも及び、当時のハルビンにおける代表的な雑誌であったと認められる。

編輯長だった竹内正一は創刊号の「北窓季信」に同誌の主旨を詳しく紹介した。『北窓』は「従来の図書館の館報とは大いに形式内容とも違ったものとなった。果してこの方法が図書館報として適当か否かは、江湖のご批判に俟つ。併し、少なくとも吾々は、館報が単に館況の報告に止めるべきものであるならば、恐らく『北窓』の発刊を企画しなかつたであろう。『北窓』には、創刊号めいた発刊の辞とか、巻頭言とか言う種類の文章を書

かなかった。その必要を認めなかったのである。これは吾が哈爾濱図書館が、此の雑誌を通じて、今後、より密接に大衆と結び付いて行くことを企及するに際して執った、態度を自ら表明するものであると思ったからである¹と述べていた²。形式から見れば、『北窓』の登場は華々しくなかったが、その主旨は明らかで、第一は形式的なものに拘らず、第二は館況の報告にとどまらず、第三は大衆と密接に結びつくということにあった。後になって同誌は時局に応じて献納小説まで刊行することになるが、上に挙げられた三つの方針はほとんど変わらないままで終刊まで貫いた。その結果、『北窓』に掲載された文章の範囲は幅広く及び、一般読者からの投書もあったが、公式館報にしては同館の置かれていた状況に対する報告などはかえって少なかった。図書館報だった『北窓』は総合雑誌の道に沿って歩いてきたのである。

『北窓』に掲載された文芸関係の文章をジャンル別に分けると以下の図となる³。



数字から見れば、一番多いのは各種類の評論、特に当時の「満洲文芸」に対する評論である。加納三郎、青木実をはじめ偽満州国に滞在していた日本人作家は「満洲文芸」の性格、性質、構成、発展などについて知恵を絞って検討していた。「満洲文学の独自性・其他」(加納三郎)⁴、「満洲文学論」(竹下辰夫)⁵、「満洲文学に於ける現実の把握」(石渡義朗)⁶などはその代表である。それに、同誌は第四巻第一号からコラム「文芸時評」、「創作時評」などを加え、偽満州国で新しく刊行された作品を詳しく紹介したり、文化、時局などの角度で解説したりしていた。ここで特筆しなければならないのは、公式館報『北窓』に掲載された評論の全てが国策、時局に迎合したりしたわけではなかったことで

1 本論文に引用された資料は全部現代仮名遣いに換えた。

2 竹内正一「北窓季信」(『北窓』第1巻第1号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.43。

3 内容でジャンルが判断にくい文章は取り入れない。数字は文章の数。

4 『北窓』第1巻第3号、pp.34-43。

5 『北窓』第2巻第1号、pp.2-13。

6 『北窓』第3巻第2-3号。

ある。例えば、中川一夫が寄稿した「盛りたてる人々」は当時の偽満州国評論界にとって解決しなければならない問題点を指摘していた。中川は、「… しかもそれ(評論)が最高度に発揮されうるためには、徒らに独善的であったり、偏頗的であったり、技術的低いものであってはならぬ。さらに現在では謀略に利用されぬ深慎の周到さが要求される。論壇を盛りたて確立する急務と困難はここにある」⁷と述べられている。中川に指摘された「謀略」は同評論で明らかにされなかったが、時局から見れば、それは国策擁護、大東亜戦争支持ということだと推測できる。そこから、雑誌『北窓』に載せられた時評は一見すると時局に応じた問題意識を持っていたが、深く読み進めば、それに対する反抗もある程度で読みとれる。こうした態度を持っていた作品は時評にとどまらず、ほかのコラムにも散見され、時局に迎合していた主流作品と一緒に雑誌『北窓』の複雑な性格を成していた。

第二位はエッセー。『北窓』に投稿した作家はエッセーの形で自分の感想を表したり、周りの生活を描いたりしていた。これらの作品は都市空間から自然風物までハルビンのことをスケッチのように生き生きと描き、植民地時代のハルビン、オリエンタリズムの視野におけるハルビンのイメージを述べていた。

第三位は小説。第一巻第一号から第四巻第二号までの『北窓』はほとんど小説を中心としなかったが、第四巻第三号からその数が次第に多くなり、半分以上が第五巻に集中している。特に第五巻第二号から掲載していた「掌篇献納小説」は、寄稿した作家といい掌篇の内容といい「戦時下」という特殊な国情に歴然と迎合し、「国策文学」の特徴が凝縮されている。

そのほか、詩歌や紀行などの数はそれほど多くなかったが、『北窓』にとっては不可欠な存在であり、評論、エッセー、小説と共に同誌の文芸性をなした。寄稿した日本人作家では偽満州国時代の名家もいるし、新人作家の名前も少なくなかった。文芸欄に掲載された文章の数は総数の半分ぐらいであり、そもそも館報だった『北窓』が何故文芸に注目しているのかについて、「編輯人の竹内正一が満洲文学界を代表する第一線作家だったこともあり、同誌の文芸欄におのずと力が入ってくる、ごく自然のなりゆきであったのだろう。或いは竹内自身、同誌を満洲文学界の新興勢力になぞらえ、新進作家の育成などを心ひそかに期していたとも想像される。当時の満洲では、大連で出ている『作文』と、新京から出ている『満洲浪漫』とが、二大有力文芸誌として健闘中だった。竹内にしてみれば、ここ北満の地ハルピンに、これという文学活動が見当たらないことに一抹の寂しさがあったかもしれない」⁸と、『北窓』復刻版を編集した西原和海がまとめている。

同人誌『作文』(大連)と『満洲浪漫』(長春、偽満州時代の新京)は偽満州国の「二大有力文芸誌」。当時の渡満した日本人作家はほとんど二誌の同人となり、「満洲文芸」を理論と実

7 中川一夫「盛りたてる人々」(『北窓』第4巻第1号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.68.

8 西原和海「解題『北窓』が志したこと」(『北窓』別冊、東京：緑蔭書房、1993)、p.11.

践と両方の面からうち建てようとしていた。大連と長春と比べ、偽満州国第三都市であるハルビンは日本の影響が一番薄かったかもしれないが、「東方のモスクワ」と呼ばれ、ロシア風の町並みを持っている上にモダンな雰囲気に包まれ、文化の多様性にも富んでいた。それゆえ、ハルビンにおける文芸活動も時代に遅れるわけがない。「文学活動が見当たらないことに一抹の寂しさがあった」と、竹内正一は『北窓』の「文芸欄におのずと力が入って」、大連と長春に続いてハルビンなりの文芸雑誌を編集しようと頑張っていた。それに対して、偽満州国に滞在していた日本人作家も『北窓』の成長に積極的に協力し、同誌の常連寄稿者では『作文』と『満洲浪漫』の同人(青木実、北村謙次郎、大内隆雄など)もいるし、『北窓』を執筆上の拠点とする作家(大野沢緑郎、野川隆など)も少なくなかった。したがって、『北窓』は発足が『作文』、『満洲浪漫』よりやや遅かったが、両誌の同人とほかの活躍していた日本人作家を集め、偽満州国における名家名作の舞台となっていた。

3. 戦時下の『北窓』と「掌篇献納小説」

「献納」とは、そもそも社寺・国家などに必要だと考えられる物をさし上げることで、大東亜戦争に入った直後、献納する相手も社寺・国家から「軍」に移った。当時の日本国内はすでに「軍隊支持」イコール「国家支持」という非常時となり、「軍」及び「戦争」は全国を中心となった。それにしたがって、日本国内・植民地・領地の文芸界も積極的な態度を取った。もっとも典型的な例としては、日本文学には献納俳句、献納小説が生れ、中国文学にも献納詩、時局小説などが登場した。「献納」と名付けられた作品は明らかに同一の主旨を持ち、大東亜戦争に情熱を燃やしていた日本文芸の諸相を映していた。

『北窓』に掲載された「献納小説」は掌篇の形で全12篇、第五巻の第二号、第三号、第四号⁹に散在していた。なぜ「掌篇」という形を取るのか、「掌篇献納小説」の使命は何なのかについて編集者は第五巻第二号の編集後記に「戦時下においては紙の一分の無駄もあってはならないので、その余白を最も効果的に活用するために本号から、献納掌篇小説を掲載すべく依頼したところ、直ちに全部が欣然として原稿を送ってきた。いずれも戦時下、益々北の守りの鉄壁の心を固めさせる愛誦すべき短篇ばかりである。この稿料は、各執筆者の名前を以て、本誌から一括、軍に献納する。必読を乞いたい¹⁰」と詳しく説明した。

引用した部分において最も注目すべきなのは「戦時下」というポイント。研究者によく指摘されたように、四十年代に入った日本文芸界は大東亜戦争の勃発に応じて積極的

9 第5巻第2号：1943年(昭和18年)5月15日発行。

第5巻第3号：1943年(昭和18年)7月15日発行。

第5巻第4号：1943年(昭和18年)9月25日発行。

10 「編集後記」(『北窓』第5巻第2号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.114。

な態度で協力していた。それについて、尾崎秀樹は「十二月八日米英に対し宣戦布告以来、文学者愛国大会開催、日本文学報告会創立、第一回大東亜文学者大会、学徒出陣、大日本言論報国会発足、第二回決戦大会、日本出版会創立、全国新聞・出版事業の整理統合、徴兵年齢引下げ、決戦非常措置要綱決定、特攻隊出陣、第三回南京大会と、三つの大東亜文学者大会の間に見られる重要な動きをいくつかピックアップ・アップするだけで、決戦体制へ向かって足がためされてゆく様相のすさまじさが実感として迫ってくる」¹¹とまとめた。

上述した活動の中で特に取り上げたいのは、「大東亜文学者大会」のことである。「大東亜文学者大会は、一九四二年一月第一回の会議が催され、それ以後四三年八月の『大東亜文学者決戦会議』、一九四四年一月の『南京大会』と、前後三回開かれた」¹²。会議の参加者は日本側の代表と日本の植民地・従属国・占領区の代表からなった。偽満州国の日系代表として第一回は山田清三郎、第二回は山田清三郎と大内隆雄、第三回は山田清三郎と竹内正一である。山田清三郎と大内隆雄は『北窓』に何回も寄稿し、竹内正一は『北窓』の編集長であり、そこから雑誌『北窓』と大東亜文学者大会の密接した関係がある程度理解される。「大東亜戦争まさに熾烈なる日、東洋全民族の文学者ここに会し団結一致永く我が東洋を蠹毒侵害せる一切の思想に戦いを宣し、新しき世界の黎明をもたらさんとす」(大会宣誓)、「今や大無畏の精神を持って邁進する事を一切の敵国に告げん。凡そ文学と思想の問題は強烈なる信念と永きに亘る刻苦とによって処理さるべきなり」(大会宣言)と唱えていた第一回大東亜文学者大会は「戦争支持」という態度を歴然と表し、日本文芸も「戦時下」に入ったと宣告していた。

翌年第五巻に入った『北窓』もだんだん「戦時下」という雰囲気の色濃くなってきている。安田文雄は1942年12月(第五巻第一号)の「創作時評」に「大東亜戦下の輝かしい、だが慌しい多事な一年が過ぎ去り、新しい年を迎えた。…内地では『大東亜文学者大会』が華々しく開催され、満州国の代表も参会して居る。我々はこの華々しさが去った後でこそ、静かに、その成果と収穫とを思い見るべきだあると思う。その点遺憾とすべきことが無かったであろうか」¹³と冷静かつ意気揚々と論じていた。同号の「文芸時評」において秋原勝二も「国家の行手に責任を持つ、強力壮健なる国民精神の維持者、育成者の任に自らを立て、奉仕の光栄の責に燃え、大東亜戦下益々加重されたその任務達成を期すべきである。文学者本来の道がここに発する」¹⁴と覚悟していた。

第五巻第二号、三号、四号の『北窓』は「戦時下」という風潮により強く染められていた。まずは表紙の変化。第五巻第二号から第四号まで、刊名『北窓』の右側に「撃ち止まむ」というスローガンが印刷され、同誌の大東亜戦争に対する態度は表紙まで反映していたことが分かる。内容から見れば、「掌篇献納小説」も同号から掲載され、スローガン撃ち

11 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』(東京：勁草書房、1971)、p.22.

12 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』(東京：勁草書房、1971)、p.22.

13 安田文雄「創作時評」(『北窓』第5巻第1号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.88.

14 秋原勝二「文芸時評」(『北窓』第5巻第1号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.104.

止まむ」と同じ第四号まで続いた。第五卷第二号の「編輯後記」により、「掌篇献納小説」の「稿料は、各執筆者の名前を以て、本誌から一括、軍に献納する」と明示していたから、雑誌のみならず、『北窓』に寄稿した作者たちの「戦時下」に対する態度もはっきりと示していた。そこから見ると、創刊してからずっと鏡のように「満洲文芸」の状況を映していた『北窓』も、四十年代に入って「満洲文芸」と共に戦争状態となっていた。

もう一つ指摘しておきたいのは「掌篇」という形である。編集後記には、「掌篇」という形を取るのには雑誌の「余白を最も効果的に活用するため」と書かれている。掲載された形式から見れば、「掌篇」は確かに雑誌の「余白」を埋めたが、それが「掌篇献納小説」というパタンの生まれた要因だとは考えられない。同時に登場した「献納俳句」はともかく、中国語で書かれた「献納詩」もよく簡潔な形を取り、芸術性というより、思想宣伝の方に注目していた。「時局小説」と「献納小説」の場合も短篇の数が圧倒的に多く、中篇と長篇はほとんど見つからなかった。なぜこうした状況になるのかについて、「献納作品」が担っている時間性と宣伝性で解説できるかもしれない。「戦時下」の産物として、「戦争支持」と「戦争協力」は「献納作品」の生まれながらの使命であり、緊迫感が漂っていた戦時下の日本においては「献納作品」も時代遅れの存在になってはならず、短時間で宣伝性に富んでいる作品を創作するのが当時の日本文芸にとって一番重要な任務となった。創作時間があまり多くなかったから、中長篇ではなく短篇の形を選んだ作家が多く、芸術性を捨てて思想宣伝しか注目しなかったのも当然なこととなった。

このような状況にしたがって、『北窓』に登場した「掌篇献納小説」は満洲文芸界の大東亜戦争に対する特別な情緒を原稿用紙一枚ぐらいの長さに短縮され、戦争末期の「満洲文芸」におけるさまざまな態度(主に戦争支持を中心としたが、すこし違和感を持っていた作品もある)がある程度で読み取れる。そして、戦争末期の雑誌『北窓』も時代性に富んだ「掌篇献納小説」により、「戦時下」の「満洲文芸」に溢れた情熱をそれぞれの視角で描いたのである。

4. 十二編の「掌篇献納小説」

『北窓』に掲載された「掌篇献納小説」は各号の状況により以下の表となる。

| | |
|---------|--|
| 第五卷第二号： | 「遺書」高木恭造/「買物行列」青木実 「ねぞめ」秋原勝二/「人間採用」尚井俊一 「奉天の小石」町原幸二/「坂」井上郷 |
| 第五卷第三号： | 「天長節」北村謙次郎/「戦ひの春」大内隆雄 「護謨ノ木」富田寿/「一人の誠」上野凌崕 |
| 第五卷第四号： | 「黙禱」三宅豊子/「神州」神戸悌 |

作者の状況から見れば、「掌篇献納小説」に寄稿した人はみな「満洲文芸」における指折

りの作家である。高木恭造、秋原勝二、三宅豊子は雑誌「作文」の同人、青木実、北村謙次郎、町原幸二は雑誌「満洲浪漫」の同人である。大内隆雄は偽満州国で活躍していた有名な翻訳家で、同氏により訳された中国人作家の作品は百篇以上にも達した。それにしたがって、「掌篇献納小説」に寄稿した作家たちは「満洲文芸」の各流派から集まり、掲載された十二部の掌篇も鏡のようにさまざまな角度から「戦時下」における「満洲文芸」の状況を反映していた。

内容から見れば、『北窓』の掌篇献納小説は大まかに三種類に分けられる：

4-1. 戦争にまつわる作品

この部分は日露戦争にまつわる「遺書」(高木恭造)と「奉天の小石」(町原幸二)、日清戦争にまつわる「神州」(神戸悌)からなる。「遺書」の主人公柴田一等兵は日露戦争の戦場で下痢に罹り、一步も動き得ない重症になったから後続部隊の軍医が来るまで現地で待たされる。そこで柴田は自分の遺言に「若し万が一にも捕虜などの辱めにあっては、国家に対する不忠の上もありません、せめて意識の確かな中に自決し於て罪を天下に謝する次第です」¹⁵と書いた。「奉天の小石」は1930年(昭和五年)の徴兵検査で丙種合格だった主人公と父親のことを語った。丙種合格に対していつもは「優しい筆まめな父であったが、彼の丙種合格の報告にだけは何の慰めの言葉も呉れなかった。ただ晩年の或日、父と共に住むようになった頃『丙種合格とお前は言ってきたが、丙種が合格かね』、菊の花の鉢を陽ざしに出しながら常になく不機嫌それだけを言った」¹⁶。主人公の父は日露戦争の時奉天総攻撃に参加した兵士で、奉天陥落の日に記念物として奉天の何処かから小さな石を拾い、毎年三月十日の陸軍記念日によくこの石を神棚に捧げていた。

周知のように、日本の近代史は日露戦争を抜きにして語りえない。ロシアに対する勝利をきっかけに日本はアジアで「日本時代」の幕を開いた。日本人にとって、日露戦争は単なる植民地の権益にかかわる戦争であったのみならず、それは東洋文化と西洋文化の大対決であり、ロシアに勝ったことはつまりヨーロッパに対する大勝利であった。それゆえ、四十年後英米をはじめとするヨーロッパと対峙した時、まず日本人の頭に浮かび上がったのは言うまでもなく日露戦争のことであろう。日本文芸の場合も、日露戦争の歴史を借りて大東亜戦争のことを語る作品は稀でなく、「遺書」は即ちその一つの実例であり、一等兵である柴田の国家と戦争に対する忠心も間違いなく大東亜戦争まで引き継がれてきたのである。

「奉天の小石」が伝えているのは参戦者自らのプライドである。主人公のお父さんは奉天で拾った小石を戦利品として神棚に置き、心の底から湧き上がる誇らしげな気持ちは歴然と映されている。そして、父親の丙種合格が与えた不満にも軍人としての自負が

¹⁵ 高木恭造「遺書」(『北窓』第5巻第2号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.24.

¹⁶ 町原幸二「奉天の小石」(『北窓』第5巻第2号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.75.

読み取れ、戦争に出た兵士に対して甲種しか認めないという態度が非常に明らかである。そこから、日露戦争によった日本軍人としての誇りは明治、大正時代を亘り、昭和時代まで伸び続いたことがよく分かる。町原幸二はそのプライドを作品に織り入れ、日露戦争のことを回想しながら大東亜戦争への励みとしようとしていることも明らかだろう。

第五巻第四号に掲載された「神州」も同じ方法を取った。主人公の岡田中尉は明治二十八年(1895年)に中国の遼河流域に派遣され、清国兵と戦った。それから四十八年を経て大東亜戦争の徴兵にあった時、岡田は「儂も征きたいんだがのウ……。ときに、困難なことでも起こったら緩くり正気の歌でも唸ってみるこっちゃぞ、天地正大の気粹然として神州に鐘るとな——」¹⁷と誇り半分、残念半分の気持ちで言った。「奉天の小石」とは違い、「神州」のバックグラウンドには日清戦争であるが、読者に伝えたかった気持ちはほぼ一致していて、昔の日本軍人の誇りを借りて戦争支持という態度を示しつつ、大東亜戦争に出征した兵士を励ます意図もある程度理解できる。したがって、「遺書」、「奉天の小石」、「神州」三篇は日露戦争、日清戦争に参戦した退役軍人の立場を借り、はっきりした態度で大東亜戦争を支持していた。

4-2. 庶民生活に取材した作品。

「天長節」(北村謙次郎)、「一人の誠」(上野凌峪)、「黙祷」(三宅豊子)、「買物行列」(青木実)、「めざね」(秋原勝二)、「護護護ノ木」(富田寿)、「坂」(井上郷)はこの作風に属する。

「天長節」と「一人の誠」は庶民生活の角度で大東亜戦争についての見解を述べた。掌篇「天長節」は偽満州国で各民族が天長節を祝う時のことを描いた。その日は春日和で、「戸毎に掲げた日の丸も美しく、木々の緑、杏の紅、どちらを向いても心の弾む和やかさに包まれていました。…顔を洗うとすぐに、私は子供たちと一緒に門口へ出て、国旗を掲げました」¹⁸。ひらめく日の丸を眺め、作者の頭に「南方や支那の奥地で戦う兵隊さんの姿が浮かびました。きょう、やはり兵隊さんたちも国旗を掲げ、遠く故国のほうを望みながら、陛下の万歳を奉唱しているのだろうか——そう思ったとき、胸の中にぐっと迫る力強いものが感じられました」¹⁹。「一人の誠」は偽満州国で長年勤続の表彰を受けた垣内が満鉄総裁に召されて国旗を掲げて神社に向かうシーンを描いた。「彼の頭の内は今一ぱいだった。すっと立って、肌身につけた国旗を出し、側に置いた棒につけ、一礼して歩調を取り、見よ東海の……と人々の腹に染む声で一路神社に向かって進んだ。臨席のものは茫然とし逢う人々は見とれ、それから思わず後に続いた。行列は一秆も二秆も、次第に長くなって進行歌は街を圧倒し、歩調はざあッざあッざあッ。もう人々は、そんな為に行列しているのかを問う者なく、強い撃滅感に満ち溢れていた」²⁰軍人とし

17 神戸梯「神州」(『北窓』第5巻第4号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.139.

18 北村謙二郎「天長節」(『北窓』第5巻第4号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.6.

19 北村謙二郎「天長節」(『北窓』第5巻第4号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.6.

て戦場へ赴く機会のない普通の日本人にとっては、日常生活に掲げていた日の丸はあたかも日本を代表する一番身近な象徴となり、愛国情緒が表せる時最適なイメージとなった。「天長節」の主人公「わたし」は国旗で「南方や支那の奥地」で戦っていた兵士のことを思い出し、軍人への敬意と大東亜戦争への支持を表明している。「一人の誠」の垣内は国旗を掲げて神社に向かい、日本人としての誇りを意気揚々と表していた。小説は戦争のことについてあまり触れていないが、「日露戦争の教育を受けて成長し、その英霊の鎮まる満洲に職を奉じて二十五箇年」²¹経った垣内のプライドはやはり「日露戦争」に根ざしているのである。最後の部分、垣内に導かれた一列は「強い撃滅感にのみ満ち溢れ」、そこから垣内のみならず作者自身の戦争に対する擁護もはっきりと読み取れる。

三宅豊子の「黙祷」も庶民生活に注目した。母子三人家族のミツの家は食事の始めと終わりに黙祷しようとした。最初はいろいろな原因でそれを忘れてたり、他人のことを遠慮して止めたりしたこともあるが、日を経るに従って母子三人はだんだん黙祷に慣れてきて、「この頃、ミツの家ではもう絶対黙祷を忘れはしない。叔父さんが来てても照れたりもしない。叔父さんも一しよにするのである」²²。黙祷はそもそも死んだ人の安らかな眠りを願うことであり、当時は国家のために没した軍人の英霊を祈るための活動となり、訓話や集会などの際によく行われていた。ミツの家では黙祷はすでに日常茶飯事の出来事となり、母子三人の戦争で死んだ兵士に対する敬意は明らかであった。

「天長節」、「一人の誠」、「黙祷」に比べ、青木実の「買物行列」も偽満州国の日常生活を描いたが、前三篇とは違った角度で戦争についての態度を示していた。朝出勤の途中で平吉はパン屋の客の行列に入った。菓子パンを買いたがった彼は自分の前に立っていた三人の娘(皆んな一つ宛紙包みを持っていた)と列に割り込もうとした女のことで腹を立て、「前後を敵で囲まれたやうな感じ」²³がした。それに、最後「平吉は、もう断然行列には加わるまいと自戒した」²⁴。ごく普通の買い物行列にしては平吉の反応は大げさかもしれないが、その大げさな反応からこそ作者の立場がよく読み取れる。青木実は『北窓』第五巻第一号²⁵の文化時評「様々な思い」で「戦時下」のいわゆる「節約」について自分の見解を詳しく説明した。「今日では、いかなる物の不足、いかなる困苦欠乏にも、耐えてゆくところの精神力をはらさなくてはならないと考える。必ずしも無駄のみが問題なのではなく、無駄なものでもなく、この一戦の完遂のためには犠牲にされなくてはならないものが生じきよう。節約は自らこれを行うのみでなく、計画的に節約が要求されても来よう。…(略)…そこで、私たちにとって必要なのは、無駄、贅沢の排除、節約のみではなく、いかなる困苦にも耐えてゆくところの勇猛心、一大決意が今日では

20 上野凌略「一人の誠」(『北窓』第5巻第4号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.99.

21 上野凌略「一人の誠」(『北窓』第5巻第4号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.99.

22 三宅豊子「黙祷」(『北窓』第5巻第4号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.48.

23 青木実「買物行列」(『北窓』第5巻第2号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.24.

24 青木実「買物行列」(『北窓』第5巻第2号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.24.

25 第5巻第1号：1943年(昭和18年)3月15日発行。

必要なのである。それは要求されて見覚めてゆくばかりでなく、私たちの一人一人が、そういう場合に直面して、直ちに『おう?』と受けて起ってゆくだけの覚悟を養ってゆくことが必要なのである²⁶。この引用文からは、原稿一枚で書かれた極めて短い「行列物買」に隠された意味が明らかに読み取れる。

「行列物買」は時評「様々な思い」と同じ主旨で戦時下において作者の「節約」に対する見解を解釈していた。ただし、「行列物買」は批判的な方法を取り、日常生活における「不」節約なことを描いている。作者の批判したポイントは三つのところに置かれた。まずは「朝の出勤の途次」。一心奉公の態度で仕事に向かうべきなのに寄り道してパンを買うことはもとより適当な行為ではなかった。そして、皆列に並んで買っていたのは生活に必要な食糧ではなく、菓子パンであり、時間を無駄にした上に食糧も無駄にしたこと。最後は列に入った人たちの買った量。平吉の「直ぐ前の三人の娘達は、皆んな一つ宛紙包みを持って並んでいた」、平吉自身も「一袋のパン」を買っている。「いかなる困苦にも耐えてゆくところの勇猛心」を提唱した青木実は「節約」を日常生活の隅々まで貫くべきだと唱えた。それを論ずるため、同氏は文化時評「様々な思い」において「買物袋」を取り上げ、「ハンドバックはいかん、それなら近頃発明のあの大きな買物袋がいいだろうか。あの買物袋は、沢山物が入ると見えて、何でもかでも買い漁って呑み込んでしまう。これではまた時局の要請に反するではないか²⁷」と述べていた。「行列買物」においては作者は自分の見解について詳しく述べていなかったが、上記の部分により、青木実はお菓子をたくさん買った人たちに対する態度も或る程度理解される。文末に平吉は「もう断然行列には加わるまいと自戒し」、それも青木実の唱えた「覚悟」だと推測できる。同氏の「節約」には戦争を支持する態度が歴然と見て取れる。

「ねざめ」と「護謨ノ木」は偽満州国で暮らしていた日本人が国家のために北満辺境に赴任したり、東南アジアで作戦を遂行する親戚のことを思い出す物語である。「ねざめ」の主人公恵三はまだ夜が明けていない時に目が覚めた。「蕭々とした軍靴の音²⁸」で北辺の守りについていて義弟のことを思い出して、義弟からのはがきの内容を頭に思い浮かべている。「ご安心下さい。ただただ一心不乱、御奉公に励んで居ります²⁹」と書いてある。「護謨ノ木」の主人公は家族と共に北満に移された熱帯植物胡麻の木で東南アジアの戦場に行った義弟のことを思い浮かべた。胡麻の木は極寒の北満に生きてきたから、義弟も必ず極暑の東南アジアで活躍できると思った。そして「南国の太陽が眩しく輝いている。そんな風景のなかに、敵を睨んで突立った精悍な横顔が眼に浮かんだ³⁰」。作品は、北満と東南アジア、大東亜戦争の南下と北進に最も重要なところで国に忠を尽くした日本人の姿を生き生きと描いた。その上、偽満州国で安らかに暮らしていた日本人が

26 青木実「様々な思い」(『北窓』第5巻第1号(1993年復刻)、緑蔭書房、1993)、p.25。

27 青木実「様々な思い」(『北窓』第5巻第1号(1993年復刻)、緑蔭書房、1993)、p.26。

28 秋原勝二「文芸時評」(『北窓』第5巻第1号(1993年復刻)、緑蔭書房、1993)、p.61。

29 秋原勝二「文芸時評」(『北窓』第5巻第1号(1993年復刻)、緑蔭書房、1993)、p.61。

30 福田寿「護謨ノ木」(『北窓』第5巻第3号(1993年復刻)、緑蔭書房、1993)、p.84。

前線で奮戦していた親戚を心配したり、誇ったりする気持ちも作品に織り入れ、前線と後方と両方の面から戦争支持という態度を示していた。

井上郷の「坂」は戦争のことを書かなかったが、偽満州国時代に貫かれた「五族協和」という精神をもって日本軍人のことを語った。荷車を引いて坂を登っていた労働者を見て「通りかかった二人の兵隊が眼でお互に頷き合うと、さっと寄って行ってものも言わずそれを押し出した。労働者が怪訝に思ったにしろ、後を振向く暇も無い位、其の儘一気呵成に緒坂の上へ押し上げられた。労働者は車をその所に止めると、後に走って行った。するとその兵隊達はもう向うへ行くとこだったの、尚もそれを追っかけて前に回ると、頻りに頭を下げて礼を言った。兵隊達は笑いながら手を振ってそれを制すると、何もなかった様にまたどんどんと歩き出していく」³¹。小説では労働者と兵隊の国籍が明らかにされていないが、当時の状況から見れば労働者は満人、兵隊は日本人だと推測できる。国策として唱えられていた「五族協和」、「王道楽土」は四十年代に入って、「大東亜戦争」の精神に迎合するために、各民族の庶民と日本軍人の間における「協和」関係までも取り入れた。掌篇「坂」は日本人と満人、軍人と庶民という二重の「協和」を描き、「和やか」な雰囲気 で日本軍人に対する敬意を表しながら、必勝の信念を述べていた。

4-3. 違和感のある作品

『北窓』に掲載された「掌篇献納小説」は全てが明らかな態度で戦争を支持していたわけではなく、違和感を持っている作品もある。大内隆雄の「戦いの春」はその一つ。作者の女弟子杉井喜美子は父親が部隊長として南方へ出征していたが、作者に出した手紙には「お父さんのことは一言も書いていない。便箋の間からヒラヒラと舞い落ちたものがあつた。拾い上げると、それは桜の花びらであつた——私はそのほんのりとした桜色の、薄いちいさな贈り物に、ほのぼのとしたものを感じ、この戦いの日に於いても彼女のおほらかな思いやりを知って、深い大きな喜びを味わつたのである」³²。その時、日本全国はすでに戦争のことだけにしか注目していないが、父親が出征していた女弟子は手紙において戦争のことについて全く触れなかった。その細かい所で彼女は戦争嫌いだと断言できないが、戦争に対する無関心な態度がある程度推測できる。それに、作者が感心しているのも戦争にまつわるのではなく、彼女が同封で送った桜の花びらで「深い大きな喜びを味わつた」という点についてであつた³³。小説は「戦いの春」と名づけられたが、戦争支持どころか、それを意識的に避けていたことが明らかである。雑誌『北窓』が、このような作品を「掌篇献納小説」として掲載したのは実に意味深いと考えられる。

31 井上郷「坂」(『北窓』第5巻第2号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.94.

32 大内隆雄「戦いの春」(『北窓』第5巻第2号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.40.

33 大内隆雄「戦いの春」(『北窓』第5巻第3号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.40.

ところが、同じ第五巻第三号に掲載された大内隆雄の翻訳作品「永遠の凱歌」(詩歌)は、作者のほかの一面を照らし出している。内容から見れば、米英のことを「蛇蠍」に喩えた「永遠の凱歌」は当時の中国文学における典型的な「献納詩」³⁴である。最後の二段落を例にしてあげよう。

「照らせ！この乾坤、我等は乾坤の主だ。醜類米英を撃滅し、人類に永恒の幸らしめよ。勝利の喇叭は欧亜に響きわたる/大地には平和の花遍く開く、ひるがえる日章旗の下、我等ともに凱歌を唱おう。」³⁵

「米英を撃滅し」、「日章旗の下」で「凱歌を唱おう」などは献納詩のキーワードであり、献納詩にとって不可欠な内容だといえる。大内隆雄はこれらのキーワードをほとんどそのまま日本語に訳し、できるだけ原作の雰囲気を守り、献納詩「永遠の凱歌」に溢れた大東亜戦争に対する賛美は訳作により生き生きと日本人の読者に伝えられた。同じ第五巻第三号で、戦争に対する時、作家としての大内は掌篇献納小説で少し違和感のある態度を示したが、翻訳家としての大内は大東亜戦争を意気揚々と支持した献納詩を訳した。そこからは、大内の複雑な個人性格と文学立場が読み取れ、同氏の反戦文学者なのか戦争文学者なのか判別しがたい身分も一目瞭然となった。

「戦いの春」に比べ、筒井俊一の「人間採用」はより皮肉な態度を示していた。満系職員採用試験に最後の番で出た男は「きょんととして、それら³⁶の質問さえ満足な答えをなしえない。…欠伸をする試験官、卓子を叩く試験官、鼻をいじくる試験官——皆が書類を蔵おうとした時、一人の試験官が、もう何度も提出した問題を出した。『建国神廟を知っているかね?』愚鈍な受験者は突然立ち上がった。『はいッ。』受験者は直立不動の姿勢をとって云った。『天照大神をおまつりしてあります』試験官はその敬虔な口調と動作にはっとし、受験者に習って直立不動の姿勢をとった。『よろしい!』中ほどにいた年輩の試験官がきっぱりと云った。そして皆は一種の感動を持って採点表に朱色で『合』と書いた。」³⁷

名前さえはっきりと答えなかった受験者はただ「建国神廟」への敬虔さで合格となる。それは何と皮肉であろう。この点から見れば、「掌篇献納小説」として掲載された「人間採用」は全く異類のような存在であり、社会制度に対する風刺しか読み取れない。「掌篇献納小説」のみならず、ほかのコラムもひそかに時局反抗の態度を漏らしていた。西原和海は『「北窓」解題』で同じ問題点を取り出し、「検閲といえは、同誌第三巻第四号の編集後記に注目したい。その末尾の部分で佐々木正は、『……また多忙中特に執筆を快諾された塙氏の佳篇とともに、大方の愛読を賜りたく……云々』と書きとめているのだが、奇怪なことに、その塙政盈の作品は、この号の何処にも見当たらないのである。要

34 劉曉麗の論文「偽満州国時期附逆作品的表裏」(『中国現代文学研究叢刊』2006.4)によると、偽満州国の献納詩は、「国策詩」と「撃滅英米詩」と二つの種類からなるとされている。1941年に大東亜戦争が勃発した後、「撃滅英米詩」はその中心となった。

35 方砂著(大内隆雄訳)「永遠の凱歌」(『北窓』第5巻第3号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.76.

36 「名前は?」、「年は?」、「学校は?」などの質問。

37 筒井俊一「人間採用」(『北窓』第5巻第2号(1993年復刻)、東京：緑蔭書房、1993)、p.66.

するに、塙の作品は、当局により全文掲載禁止を食らったのであり、佐々木は、誌面の片隅に右の文書を書きとめることによって、その事実を読者にひそかに伝えるメッセージに代えたのだらうし、同時に、権力に対する精いっぱい抗議としたのであろう。これは、同誌スタッフの気骨の一端をよく示すエピソードではあった³⁸。 「誌面の片隅」に置かれた抗議を「精いっぱいの抗議」と呼んだのは少し言い過ぎかもしれないが、同誌に掲載されていた違和感のある作品は無視されてはいけない。四十年代の「戦時下」に色濃く染められた「満洲文芸」は単に戦争を支持する「戦争文芸」ではなく、その中には時局に迎合しなかった作品もあり、ささやかな力で戦争に反抗したこともある程度見て取ることができる。

まとめると、三つの種類に分けられた「掌篇献納小説」はちょうど三つの角度で戦争末期における「満洲文芸」の状況を映出していた。まずは直接に戦争の素材を生かす方法である。それは日露戦争・日清戦争の思い出を借りたり、大東亜戦争における実際の戦況を利用したりして戦争支持という態度を示していた。二つ目は、日常生活から創作の題材を取り込む方法である。一見するとありふれた日常茶飯事を描いていたが、作者はそれにより「戦争支持はすでに庶民生活の隅々までに滲みていた」というメッセージを読者に伝えていた。これらの方法は戦争末期に入った「満洲文芸」の主流であり、「戦時下」の情熱に吸い込まれた「満洲文芸」の状況を生き生きと映していた。三つ目は、違った立場を取り、皮肉な筆致で戦争のことを批判した作品もあるし、冷静的な態度で敗戦の兆しを見せた作品もある。それらの作品は当時の主流作品とは対抗できなかったが、無視できない存在として主流作品と一緒に戦争末期に入った「満洲文芸」の複雑な性格をなした。

5. おわりに

「大東亜戦争」の風潮に巻き込まれた戦争末期の『北窓』は主に戦争支持という立場を取ったが、その中から反抗の声も聞こえた。第五巻第二号から第四号まで載せられた「掌篇献納小説」は縮図のように当時の「満洲文芸」を展示していた。掌篇に寄稿した作家は自分なりの立場で直接に戦争及び軍人のことを描いたり、日常生活に取材したりして戦争に対する見解を述べた。特に指摘すべきなのは、『北窓』の「掌篇献納小説」の全てが戦争支持というスローガンを掲げていたわけではなく、その中から国策に対する無関心や皮肉などの内容も読み取れ、戦争末期に入った「満洲文芸」の複雑な性格を明らかに映し出していることである。

³⁸ 西原和海「解題『北窓』が志したこと」(『北窓』別冊、東京：緑蔭書房、1993)、p.10.

参考文献

- 青木実(1943)「買物行列」(『北窗』第5巻第2号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
青木実(1943)「様々な思い」(『北窗』第5巻第1号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
秋原勝二(1943)「文芸時評」(『北窗』第5巻第1号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
井上郷(1943)「坂」(『北窗』第5巻第2号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
上野凌崕(1943)「一人の誠」(『北窗』第5巻第4号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
大内隆雄(1943)「戦いの春」(『北窗』第5巻第3号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
尾崎秀樹(1971)『日植民地文学の研究』, 東京: 勁草書房。
北村謙二郎(1943)「天長節」(『北窗』第5巻第4号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
神戸悌(1943)「神州」(『北窗』第5巻第4号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
高木恭造(1943)「遺書」(『北窗』第5巻第2号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
竹内正一(1939)「北窓季信」(『北窗』第1巻第1号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
筒井俊一(1943)「人間採用」(『北窗』第5巻第2号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
中川一夫(1942)「盛りたてる人々」(『北窗』第4巻第1号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
西原和海(1993)「解題『北窓』が志したこと」(『北窓』別冊, 東京: 緑蔭書房)。
福田寿(1943)「護謨ノ木」(『北窓』第5巻第3号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
町原幸二(1943)「奉天の小石」(『北窓』第5巻第2号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
三宅豊子(1943)「黙禱」(『北窓』第5巻第4号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
安田文雄(1943)「創作時評」(『北窓』第5巻第1号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
方砂著(大内隆雄訳)(1943)「永遠の凱歌」(『北窓』第5巻第3号(1993年復刻), 東京: 緑蔭書房)。
劉曉麗(2006)「偽満州国時期附逆作品の表裏」(『中国現代文学研究叢刊』第4号)。

祝 然 Ran ZHU

(中国)大連外国語大学。講師。中日比較文学、日本植民文学、「満洲文学」など。「从『哈尔滨诗集』看室生犀星眼中的中国东北城市」(『江淮论坛』合肥: 安徽省社会科学院, 2012年第5期, 2012)、「殖民语境下日本大众文学对于(哈尔滨)的解读」(『东北亚外语研究』大连: 大连外国语大学, 2013年第3期, 2013)、「伪満州国时期大内隆雄文学翻译活动研究」(『东北亚外语研究』大连: 大连外国语大学, 2014年第2期, 2014)。